

国宝東福寺三門上層内部彩色保存処置 受託研究報告 第21号

茂 木 曙

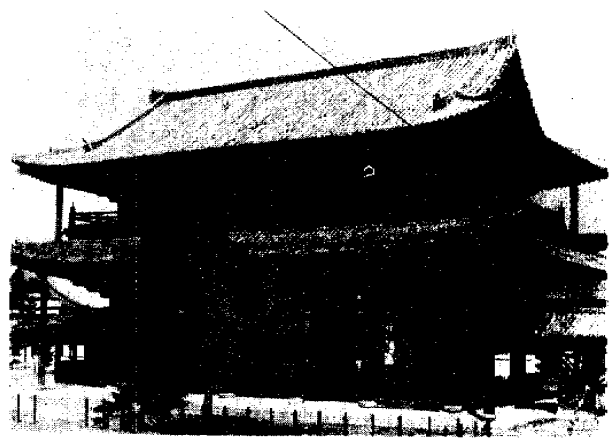
I. はじめに

京都東山の慧日山東福寺は聖国師を開山とする禅刹で嘉禎2年(1236)から建長7年(1255)まで19年間に亘って造立され、摂政九条道家が、奈良の東大、興福の二大寺にあやかる様との念願から両寺の名のそれぞれ一字宛をとって寺号としたと言われている。

しかし大堂宇は相次ぐ罹災で烏有に帰し、創建当初の建物と云えるものは今存在していない。

この三門は室町時代至徳年間(1384~1387)の建立とされ、五間三戸二階二重門で屋根は入母屋造本瓦葺とし、両側に山廊を付け各切妻造本瓦葺としたもので、三門の中でも最古且最大、又姿も極めてすぐれたものとされ、昭和27年3月29日付を以て国宝指定を受けたものである。

三門上層内部は中央の三間を鏡天井とし、これに兆殿司吉山明兆(~1431)・寒殿司の筆になる彩画が描かれ天井桁・斗拱・虹梁・柱などには彩色文様が一面に施されている。この彩画、彩色文様の剝離・剝落がかなり目立っているため、その保存のための剝落防止処置の研究を京都府教育委員会から委託を受け、化学研究室岩崎友吉室長並びに樋口清治技官両氏の協力のもとに実施処置研究を行なったものである。作業指導その他には修理技術研究室の立田三朗室長中里寿克技官が適時加わり作業に就いては京都府文化財保護課担当官の斡旋を得、京都美術大学の便宜により学生諸氏の助力をかりることができた。実施期間は昭和42年1月より昭和44年3月である。



① 全 景

II. 処置前の状況

その巨大な三門楼上層内部は、三区に分かれた鏡天井の寸法は、各々が19.6米×4.3米もあり上層床板から天井板までが6.42米と計測されている。

鏡天井板絵は、大きく飛天、楽器等の絵があるが、それが直接天井板にかかれたものではなく貼り合わせたかなり厚手の和紙に極彩色で描かれたものを天井板に貼りつけた後、絵の輪廓とは関係なしに外側から大雑把に刃物を当てて周囲の余白を切り取ったものであることが貼り紙の切端から板面にまで切り込んでいる刃物の条痕で明らかであった。

この貼り上げた紙の天井絵が、処々で天井板から剥離垂下して、大は 30~40 cm も、たれ下り小は又、各処で遊離状態にあった。

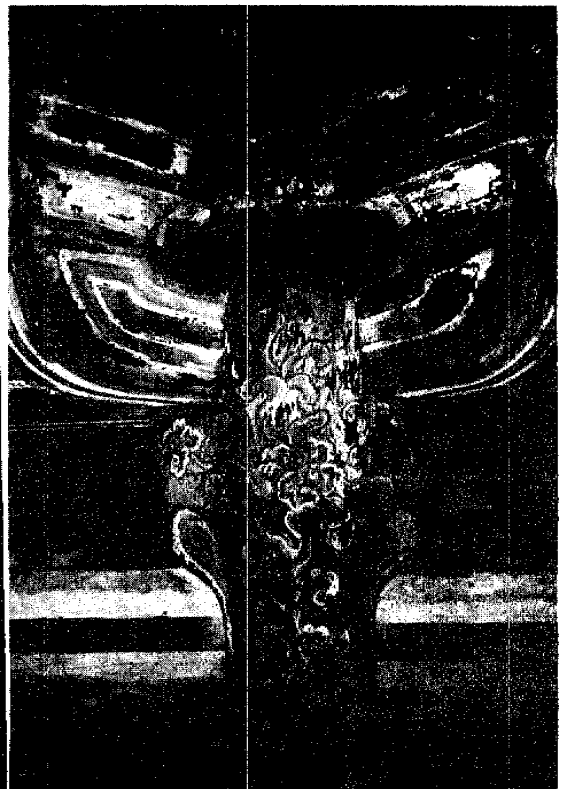
鏡天井周縁は額縁状に巾 30 cm 程に極く薄手の紙に筆太の墨描で藍色が変色したものとの説もある唐草模様を描いたものを貼りつけてあったがこの部分は紙そのものが脆弱化して粉の様に剥落していた。桁、斗拱、虹梁などの組物の彩色は、胡粉下地に顔料を使って描かれているが殆んどが粉状に老化し浮上っていた。柱に特に数多く見られたが空洞や欠損部につめられた土がまだそのまま残り、空洞の縁に布貼りの跡があったり、布の上に彩色があつて、布の部分から剥離しているものも認められた。

III. 保 存 処 置

天井の厚手の紙の剥れに対しては、濃度の低いエマルジョンでは接着が困難であり、一部実験の結果、ペースト状のアクリル変性醋酸ビニール系エマルジョン樹脂によって、接着しておくのが望ましいと考えられた。この合成樹脂を紙と板との接着の要処々々に使用し押し上げて圧迫接着する方法をとった。大面積の垂れ下りには処置中に紙が折れたり、落ちるのを防ぐため、透明アクリル板を当てて下から支え乍ら処置を施した。鱗片状の剥離部分は、同じペースト状の樹脂を篋で差し、押し上げて、圧着する方法をとった。紙から浮上っている顔料に対しては化学研究室で合成し、すでに京都知恩院経蔵で試験済のアクリル酸ブチルとアクリル酸メチルの共重合体のエマルジョン 20% 溶液と、PVA 6% 溶液の同量混合液を原液として、三倍量の水で稀釈したものを用いて筆先で顔料と紙の間に微量をさし、濾紙を軽く当てて押えた。



アクリル透明板を下から当てて作業中



処置後

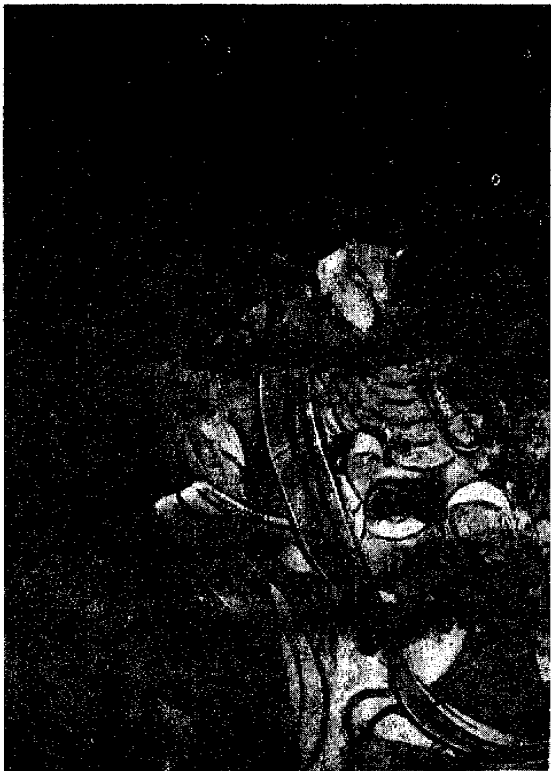
その際紙に染を作らぬよう充分注意して行なった。天井周縁の唐草模様部分は、貼られている薄紙が粉化しているため直接手をつけることが不可能で、前記合成樹脂の原液一に対し水四の割合に混合したものを軽く噴霧し、おさまった頃を見定めて濾紙圧着したが、これによって



処置前



処置後



鱗片状に剥離している天井絵の一部



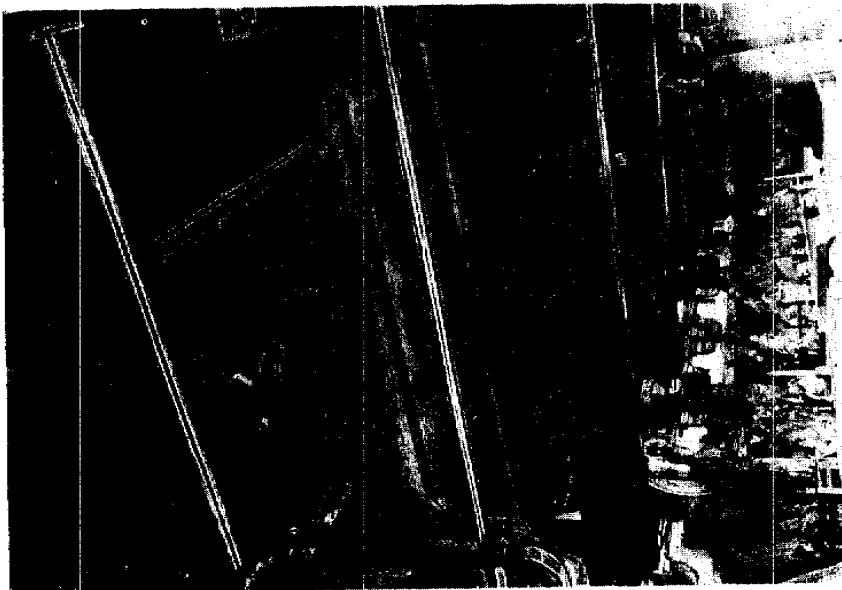
処置後



処置後



処置後



処置後



柱彩色の布目
(恐らく空洞に土をつめて、布貼りした上に彩色したものであろう)



柱の空洞につめられた土



柱の空洞

剥落は防止できたと思われるが樹脂処置によってややぬれ色になった地色のために、黒い唐草文（藍色が変色したものと考えられる）が、やや不明瞭にしたかの惧が生じた。鏡天井の文様部以外の余白は淡色に黄土が塗られ殆んど剥落していたが、残存部は原液1に対して水3の混合液を吹きつけて濾紙で圧着した。天井下の桁、斗拱、虹梁等は木地に胡粉彩色したもので、厚く積った埃を除去する際にかなり粉化した彩色表面の顔料保持に苦心したが、総じて樹脂の吸収もよく噴霧、圧着の方法で処置したがこれも対象局部の現状と、天候気候の状況によって異なるが、寒冷期作業の際は、原液1対水3の混合液を用いた。夏期は乾燥の早過ぎるのにそなえて、原液1対水4の溶液を用いて吹付回数を多くして見たが、結果は良好と認められた。柱に多く見られた布貼りの剥離部分に対しては、原液のま

ま注入し接着した。尚充分なる剝落どめ処置は解体後に安定した位置に於いて行なわれることが望ましい。

IV. む す び

今回の剝落どめ処置の特徴は、建物の解体修理が予定され、その折の震動、衝激によって彩色の剝離部分が剝落してしまうのを防ぎ、解体後に各部材に互って、本格的な剝落どめ処置を施してから組上げるという目的と、鏡天井の絵が、板に直接描かれたものでなく、和紙に描いたものを貼ってあるものの応急的剝落どめ処置である。それに加えて建造物が巨大で、処置を要した彩色部の面積が400平方メートルもあり、この量的な問題があげられるが、一応は解決したものであると思う。

Résumé

Akira MOGI: Preservative Treatment on the Coloring in the Interior of the Upper Story of the San-mon Gate, Tōfuku-ji

The San-mon (front main gateway) of the Tōfuku-ji Temple, registered as a National Treasure, dates from the thirteenth century. Its upper story is decorated all over the interior surface, including the ceiling, with painting in color. The painting had "floated" from the surface and badly exfoliated, so that treatment with synthetic resin was given to prevent the pigments from falling off. Where the painting is done over lime-white priming on wood, the painting had deteriorated into a powdery state.

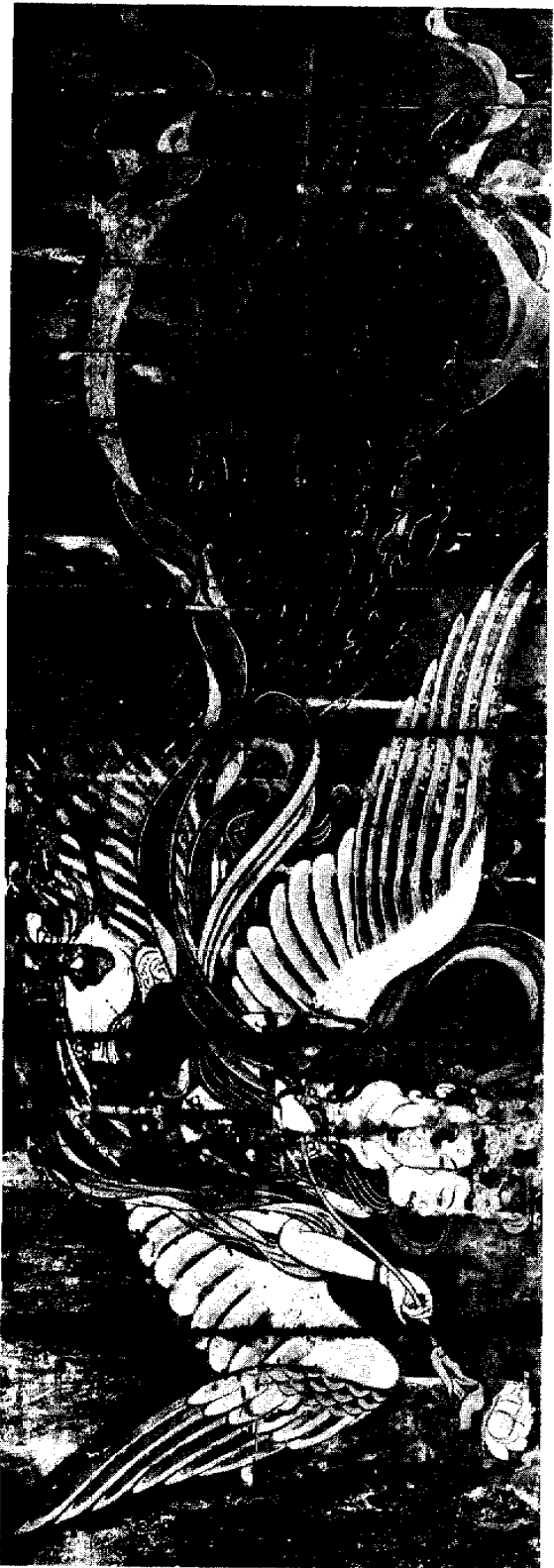
The pictures of heavenly maidens, musical instruments, etc. on the ceiling are not painted directly on the ceiling boards but are painted on sheets of paper and subsequently pasted to the boards. The pigments had partly "floated" from the paper, and the paper itself had peeled off and remained suspended from the ceiling. For the floated pigments, we specially prepared a compound of the same amounts of 20% solution of acrylic emulsion and 6% solution of P. V. A. The compound, diluted with water three times the amount, was applied to the exfoliating parts with the tapering point of a writing brush. The peeling parts of paper were fixed, after a test, by a point-binding method (applying the paste in dots on the paper instead of spreading it all over) with a paste-form emulsion resin.

The pigments applied over lime-white priming on wood, such as those on beams and bracket capitals, were treated with spray of solution of varying densities judged adequate for cold and hot seasons respectively.

The gateway is scheduled to be taken to pieces for repair. The disjointed members will be given more thorough treatment against exfoliation prior to reconstruction of the building.



京都・東福寺三門内部天井飛天之図（剝落止処置後）



上に同じ